

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.041; はじめに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2009-04-28 キーワード: 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/1581

はじめに

小長谷有紀

人類にとって20世紀とは何だったのであろうか。人口が爆発的に増加してしまったグラフを見ると、否応なしにこのような問いが頭をもたげてくる。それはまた、これから先、私たちはいかに生きるべきかという問いと同義にほかならない。

本書は、この歴史的な意味をもつ重要な問いかけを、モンゴル国を対象として考察するための資料集である。言い換えれば、モンゴルにとって20世紀とは何だったのか、という問いであり、その問いをめぐるモンゴル人の証言集である。

本書でとりあげた証言はたった4人分にすぎない。もとより、たった4人の声ですべてが語り尽くされるはずもないのだが、それにしても、これらの人びとの語る意義は大きい。なぜなら、各人がモンゴル社会の近代の変容に強く関わった当事者たちだからである。

モンゴル高原の20世紀は、人類の歴史として社会主義化とその放棄という大きなうねりを2度むかえた。それによってモンゴルは、ソ連に続いて世界で2番目の社会主義国として、1924年に「モンゴル人民共和国」となり、2002年に人民共和の4文字をそぎ落とし、ただの「モンゴル国」となった。

この約70年にわたる社会主義化の過程において進行した社会変容のうち、もっとも特徴的な事象として、草原にあったものを変えたこと、すなわち「遊牧民の社会主義的集団化」、草原になかったものを作ったこと、すなわち「大規模農場の建設」、草原ではないものを作ったこと、すなわち「首都における工場の建設」という3点にとりあえずしぼってみることは妥当であると思われる。

そして、これら3点のあいだには密接な関係がある。工場の原材料は、草原の遊牧民と農場とが提供した。草原は農場を割譲した。そして、そのいずれもが定着化というベクトルを共有しながら、発展をめざす1本の綱に編み込まれてゆくのであった。

そうした歴史の綱が編みこまれてゆくとき、現実を生きていた人びとは、いかに知恵と力を尽くしたか、いかに個人のしあわせと社会のしあわせを重ね合わせていたか、しかし、にもかかわらず、いかに虚実は交差してしまったか、具体的な言葉から真実をうかがい知ることができる。

社会主義のもと半世紀をかけて得られた実りも、失うには一瞬で事足りる。失ったものの大きさは、政治的立場の違いを超えて、多くの人びとに共通する喪失感を今日生み出している。創造に没頭した過去をどれほど礼賛したところで、失ったものはもはや戻らないし、破壊に傾倒した過去をどれほど批判したところで、やはりもとには戻らない。そしてまた実は、創造と同時に破壊は一方で並行して存在していたし、だ

から破壊もまた創造の一過程であるのかもしれない。いずれにせよ、新たなスタート地点に居るのなら、未来を考えるための資料として最大限に活かされることによってのみ、過去はその意味をもう一度、取り戻すことができるであろう。